

第三百七十三回 青葉会

平成二十九年四月二十七日(木)

午後五時半〜八時半 文京区民センター

〈顧問〉

〈選者〉

〈出席者〉

〈投句〉

〈紙上選句〉

《互選句》

☆ 川合万里子 先生  
◎ 川口孤舟

今井紀久男 大林猛 柿崎忠彦 川口孤舟 小西弘子 山内天牛  
伊賀山そらお 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 豊田ゆたか 中野一灯  
古田昇 星田啓子 宮内規雄 山崎亜也 山田けいこ 渡邊盛雄  
赤田堅 安部眞希子 楠田彦十 在間千恵 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章  
福島正明 M H氏 村田くに子 山本三恵

七点

鉛筆を耳に戻して繕糶(せる)  
☆◎母と来て終の花見か車椅子

孤舟 (眞・彦・弘・正・く・天・三)  
堂哉 (堅・万・孤・弘・敏・M・く)

三月歌舞伎座千鶴楽

六点

夜桜や揚巻のまま打上げに  
足で足洗ふ園児やチューリップ

紀久男 (眞・忠・弘・敏・允・天)

五点

☆◎吉野山護摩焚く僧に白き蝶

けいこ (猛・万・孤・敏・允)

(☆↓「護摩を焚く僧へ白蝶吉野山」)

四点

☆初蝶を追ふ子襦袢(むっき)のまだ取れず  
(☆…中七↓「追ふ子の襦袢」)

孤舟 (堅・紀・猛・万)

花昏れて癌病棟の鳩時計

全 (弘・允・正・三)

◎ままごとの莫菴たんぼぼを避(よ)け敷かる

恵洲 (眞・猛・孤・弘)

◎免許証返上と決め四月尽

全 (眞・忠・孤・允)

☆行く春をしばしとどめん友と酔ひ  
(☆…中七↓「暫し止めむ」)

ゆたか (万・彦・千・M)

◎一瞬(ひととき)は異界に遊ぶ花篝(かがり)

一灯 (紀・允・天・三)

◎電車待つホームに花舞ふ昼下がり

けいこ (紀・孤・龍・正)

三点

☆「花の舞ふプラットホームの昼下がり」

そらお (万・千・龍)

◎高齡者集ひ恩師を偲ぶ春

全 (紀・万・龍)

◎葬儀終へ帰る都は葉桜に

忠彦 (紀・孤・く)

山葵漬考へ買ひ足す発車ベル

弘子 (紀・龍・M)

ノイエ節へ助け舟出す桜山

全 (紀・彦・M)

哲学の道も疏水も葉桜に

健介 (龍・千・く)

人待ちてをんな物喰ふ春の驛

亜也 (紀・彦・天)

(☆…中七の表現は詩心に遠ひ)

天牛 (万・忠・允)

☆ゆるゆると妻と近間の花見かな

天牛 (万・忠・允)

(みほとせ ほ かとら)

二点

☆三百年祝ぐ河東節の舞台花の宵

紀久男 (万・敏)

☆この一献味はひ深し花茶漬

猛 (堅・万)

◎入園の孫にLINEでおめでとう

忠彦 (万・敏)

◎春愁や効く薬ほど副作用

全 (孤・正)

麗日のヨットハーバージャズ流れ

孤舟 (M・三)

☆デイスーパービスへ押す車椅子うららけし  
(☆…「す」音三つの流れが佳い。↓「うららかや車椅子押すデイスーパービス」)

恵洲 (万・く)

法輪をもうひと廻し春愁ふ(石山寺)

堂哉 (堅・三)

☆桜五分咲き西行になりきれず

昇 (孤・弘)

☆花筏割りつつ君がボート漕ぐ

啓子 (彦・千)

- ☆◎春ひとり寂しさに耐へシヨパン聴く  
 ☆二人静花穂（かすじ）ひと本折れにけり  
 人戀ひて七里ガ浜の春の宵  
 規雄 （万・孤）  
 全 （万・龍）
- ☆ 廃線の果ては菜の花ばかりなり  
 けいこ （眞・猛）  
 天牛 （紀・万）
- ☆ 御先祖の三百回忌馬酔木咲く  
（☆：中七↓「三百回忌や」。切字『や』をいれると句格が上がる）  
 盛雄 （孤・正）  
 全 （紀・忠）
- ☆ 夜桜やときに物の怪見え隠れ  
 皇（すめらぎ）の億のきずなや風光る  
 猛 （堅）  
 全 （千）
- 一点  
 風雨にも枝に寄り添ふ花健気（けなげ）  
 全 （千）  
 空は青花は紅白葉は緑  
 全 （龍）
- ◎ 美しきままに生きたや花筏  
 棹を挿す一寸法師花筏  
 忠彦 （孤）  
 孤舟 （彦）  
 健介 （天）  
 堂哉 （三）
- 指の間を時がこぼれる春惜しむ  
 ゆたか （堅）  
 瀬戸の波霞む島影雲に入り  
 啓子 （天）  
 西からの鯛食ふ日や桜五分  
 全 （紀）  
 春雷の駆け廻り来て我を撃つ  
 全 （千）  
 花咲ける空にひとすじ飛行機雲  
 けいこ （猛）  
 轉に頑張る力や山登る  
 天牛 （万）  
 削り残しの髭の友らの春の会  
 全 （忠）  
 天上は豊かなりけり菜種梅雨  
 盛雄 （忠）

●次回青葉会

五月二十五日（木） 井の頭吟行

十時集合 JR・京王井の頭線「吉祥寺駅」北口 はな子像前

雨天決行 同園吟行

十三時半〜十六時 句会（御殿山コミュニティセンター）

平成二十九年四月句会報

一 今回は出張含むドタキャン多く出席わずか6名！投句12名。弘子さんが5名の編集委員の一人だった「季題別・中村草田男全句」（角川書店2017/2/28 1万円）（11,614句掲載）（大手新聞紙の書評欄に好評）及び三月終刊「萬緑」（70余年・806号）の後継誌『森の座』創刊四月号を回覧し乍ら句会開始。猛さんの披講で御覧のように孤舟選者、堂哉さん、一灯さんと新人のけいこさんが好成績でした。  
 小生持参の京・尾張屋の蕎麦板と市原弘之さんからの純吟「染井桜」（豊島区の染井関係者が造らせた特注品）田中稔也さんからの大吟醸「龍力・米のささやき」（姫路・綱干）、忠彦さんよりの助六鮓を賞味しつつ早や目に終了。お開きとしました。

二 小川恭延さんと中山芳博さんの追悼句・遺句を別紙に掲載しました。

平成二十九年五月二十日

紀久男記

# 中山芳博さん追悼句

平成二十八年八月三十一日逝去 享年七十二歳

・ かなかなに目覚め旅寝の髪梳(と)かな

万里子

― 献句につきましては一昨年九月青葉会でのご本人様の高得点

「虫の音に心遊ばせ爪を切る」に副わせたいただき詠んでみました

・ 人事通の芳博逝けり暑き日に

天牛

・ 句会準備共にせし友晩夏に逝く

くに子

― 丸紅句会の最初の頃、いろいろ手伝って戴いた事思い出されます

・ 早すぎる死を悼んで

正明

・ 人気なきホツケグランド秋の風

孤舟

・ 高き山崩れ献杯菊芳し

ホツケの雄逝く

・ 佳麗なるステイック捌き秋暮(くも)る

堂哉

・ 閑けさや新酒の献杯句仲間へ

紀久男

(九月青葉会の冒頭)

・ トラキチの熱血漢逝く秋暑し

全

## 略歴

1943年10月7日生。1966年3月神戸大学卒↓4月丸紅入社・国内鉄鋼↓副本部長↓

中国四国支社長↓富安(社長) (2001年5月退職) ↓石岡石材(顧問)

・ 独身時代は従業員組合の中央執行委員として活躍

・ 数少ない丸紅陸上ホツケ部の名選手でした

・ 青葉会創立以来のメンバーの一人でしたが、長期間の休会の後、数年前に復帰されておられました。(出席の折にはいつも焼酎・鹿児島中心の逸品を寄贈)

## 遺句

大寺の鬼の瓦や冬暮るる

娘なくひつそりと妻の内裏雛(だいらりびな)

葉の陰にはげ茄子一つ残りをり

平成2年「50周年記念句集」より抄出

春霞怒(いか)る龍ならむ大津波

大地震や君の死知らぬ春七日

みちのくへ送る荷中に花の種

寝そべりて釣果は問はず春の海

花はらり花びらはさみ俳句帖

夏蝶やたはむる樹々の奥の闇

躊躇ひて無職と書きぬ翹雲

卒(業) 五十年恋語らせる新酒かな

冬温しクレーンを肩にスカイツリー

村埋めし雪の底這ふ灯りかな

短日や庭師のはさみアレグロへ

平成23年「300回記念句集」より抄出

超然と枯薦まとふ老樗

白河の逆旅(げきりよ)に霰聴く朝(あした)

冬木立明るく雨をまとひけり

「356回」2015・11・25

冬夕焼伊吹にもぐり闇へ溶け

みすずかる信濃広ごり雪しんしん

下段に続く

バツカスも加はりをりてキラタンポ

「357回」2015・12・10

卒業や以下同文の表彰状

鬼は外人間擬(もど)き一人酌む

赤マフラー似合はぬ彼氏連れてくる

「359回」2016・2・25

三輪山の春風ゆらす麵すだれ

遠き日の夢にちははは浮き人形

生醤油の匂ひ来る街梅雨入りかな

決められぬ我を囁すや法師蟬

炎熱や気骨そがれて恋占い

棕の群れ空を傾け反転す

牡蠣割女背の子揺り上げ手休めず

木の実雨戦死の墓に音降りぬ

寒灸に耐えて背中であひけり

寒月や心の隙間(すきま)を照らしをり

茂吉忌や亡母がつきたる美しき嘘

忽然と峠の空から遍路来る

松戸・流山地区の「泥几句会」近詠より抄出

病む妻に薫風の窓少し開け(350回)

無住寺や憂さの全てを法師蟬(353回)

虫の音に心遊ばせ爪を切る(354回)

遺句

○印は「萬緑合同句集」第4号（平成8年刊）掲載

短日に鬪牛場の色沈み  
寺の屋根囲みてありぬ冬の村  
ふところに朝の日差しや更衣  
丈伸びし娘の細き肩花火降る

○稲掛くる女の面整へり  
夏木立両手ゆらゆら一輪車  
青柿や葉に包まれて充ちんとす  
芒原穂のある限り日の宿る

「青葉会合同句集」第50回記念より抄出（平成2年）

手入れせし登山靴あり冬日和  
行く春や小さき鬻の相撲弟子

○笹粽優しきものを包みたり

○老母押す空乳母車辛夷咲く

○立禅の僧の目澄むや若楓

○一筋の学ぶ道あり雲の峰

○柔かき文字に憩ふや鶴の詞（倭漢朗詠抄）

○晴つゞき穩かに風邪居座れる

紅き幡札所の夏の華げる

島影を横一線に冬日落つ

緑蔭や僧像一つ喝發す

駅ホーム気長に坐すや秋日和

「100回記念句集」より抄出（平成10年）

梅雨寒や鏡の底の目に対す

二星指し何を語るや姉妹

大道芸少女秋日を撥ね上げる

やや遠出四温日和の老夫婦

真実の埋もれゆく世や梅雨荒るる

験閉ぢ真紅の冬の日を宿す

指先に幼き日あり風の引き

小さき闇残して去りし蟬の穴

イヤホン外れしままに目借時

天一角開け伊那谷青田射す

枝豆の殻重なりて句会終ふ

「200回記念句集」より抄出（平成15年）

一休み町屋（まちぎ）の店の鱧（はも）茶漬

緑蔭に響く弦音や円覚寺

河骨の小さき黄点る雨の池

なほ語り合ひたき人や春に逝く

拉致ありし無言の浜や冬の波

嵌（は）め込みし戦禍の壁や夏聖堂

浴衣着の下駄音まろし裏通り

幻や夏装の隊伍椰子の下

菜の花や万葉の歌碑海望む

卒業式故郷の復興誓ふ子等

「300回記念句集」より抄出（平成23年5月）

○春雷や一塊に眠り撃つ  
○燈台の白き直立夏近し  
○花吹雪托鉢僧の笠目深  
○雨の音吸ひ沈めたる植田かな

秋の湾伊根の舟屋に鷗鳴く  
ランナーの鋭き加速冬日燃ゆ  
水牛に曳かれて春の海渡る

洪水の跡に子探す親の影

暖房の揺らすカーテン留守居する

目覚め時包む静寂雪ならむ

余寒風停車の度に忍び込む

移設せし古民家の奥雛飾り

天災も人災も経て秋寂びぬ

ペランダを跳ねる番や秋雀

蟬時雨杉の中なる永平寺

秋の海眺め和倉の湯に浸る

「萬緑合同句集」第5号（平成29年3月）

辻毎に寺の屋根見ゆ五月空

被災地の空にありなん今日の月

漱石の草稿厚し冬館（横浜吟行）

大寒の一日蟄居す老夫婦

養生の身につれなくも冴返る

桜狩病む身なれども抗（あらが）へず

金婚式縁と子等に包まるる

緑蔭の風や歩調も甦る

天高し病軀に力充ち来たる

窓に凭り梅雨満月の光受く

秋暮れて己の余命推し計る

秋夕焼塀（ねぐら）に鳥の影帰る

泣く程に人笑わせる師走寄席

300回句集以降の青葉会報より抄出

多摩川や全て奥まで春霞

寒明けて八十路の一步踏み出せり

丘を抜く大船観音夏日さす

秋晴れや蟄居せる身を解き放つ

大寒の空に念ずる師の快癒

春時雨児等の黄傘に囲まるる

暮れ泥（なす）む春の空ある留守居かな

日の光明かるく通す柿若葉

養生の身を励ますや白牡丹

被災地へ千年桜贈るとよ

ペリリユウ島慰霊の旅や春寒裡

夏晴れや隊伍に遅れることも良し

太鼓の音駅舎に聞こえ村祭

秋晴れて杖を頼りの一巡り

大樺鳥の巢今日も影動く

# 小川 恭延さん 追悼句

平成二十八年十二月十六日逝去 享年八十二歳

・三人共（みたりとも）師を待つ新入社員なりし 万里子

―この師は中村草田男先生で、会社の文化部の俳師として絹湫が母校の草田男師を招聘したのでございまして

・朗朗と唄ひし恭延冬に逝く

天牛

・忘年会の日に逝去とは恭延君

全

・句友逝く温顔偲ぶ年の暮

くに子

―私の親友が恭延さんと同課で噂話をよくきかされました

・さよならと友は旅立ち冬銀河

穰（ゆたか）

・天空にきくカンツオーネ梅の園

全

・カンツオーネが締める二次会年の暮

全 正明

・旅行けば古城は臚ライン河

全

醒めては第九を聞かせ給ひし小川大兄を偲びて

・フロイデを歌ひて逝くや京の暮

市原弘之

（…青葉会関係者では最も永いおつきあい。短冊に潤筆）

・森の春騒ぐカラスの見たるもの 稲垣真澄

―「植物園におられましたね」。につこりと小川さんは問はれた。以前、よく樹下に午睡を楽しんだ。そんな姿がひよつとすると散策中のお目を汚したかもしれない。小石川植物園には樹木だけ

でなく、意外に鳥や小動物も多く人々を驚かす

（…産経新聞・文化部の元編集委員で当会は永らく休会中。毎夏、小川さん、稲垣さん、高橋敏郎さん

と小生の四人で暑氣払…蕎麦の「松翁」↓ベルギービールの「ブラッセル」）

・テノールの突如途絶えし年の暮

そらお

・アデオスと大きく叫び年果つる

五郎太

・社運かけ生きた句友や暮れに死す

忠彦

・味のある句風の友逝く冬の朝

全

・小春日に恭山隆延不帰の川

堀口康弘

（…大学の後輩で法務部時代、小川さんの下でし事件担当。中七は小川さんの戒名で下五は「帰ら

ざる河」からの連想の由）

・惜しまれて京をのこ逝く師走かな

紀久男

・句の酒仙冬薔薇埋む柩かな

全

・畏友逝きあの唄聴けぬ年の暮

全

（葬儀参列者に訊くと各人の思っている唄はいろいろです…第九の「合唱」、カンツオーネ、メキシコ民謡、イタリア共産党の歌、「会議は踊る」など）

（迫力のある美声で海外旅行でも現地の有名歌唄ひ喝采を浴びられた由）

・大寒や畏友の愛せし酒献杯

全

天牛さん・敏郎さん・市原弘之さん・稲垣真澄さんと偲ぶ会（松翁）

―小川さんとは青葉会（川合絹湫・万里子御夫妻、黒川章彦さん、御一緒に井の頭吟行↓歌行燈

）（小池治さんらと伊那吟行）（村岡英樹さんらと高遠吟行等）読書会（高梨由美子さん・高

橋敏郎氏）法務部若手の会（ポールクラークさん、堀口康弘さんらと南蛮亭や壺仙）等々想い

出尽きません

略歴

1933年12月18日生。1956年3月京大卒↓4月丸紅飯田大阪本社入社・海外統括部

特貿課（翌年東京移転）↓海外事業課（↓室↓部）↓イベリア会社（マドリッド）↓海外事業

部↓ボゴダ出張所長↓海外事業部↓法務部長（し事件の最高裁対応）↓監査室長（1991年

6月退職）↓丸紅建材リース監査役。